

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	螢の光
Author(s)	宮島, 眞一
Citation	龍南, 201: 43-51
Issue date	1927-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8940
Right	

螢の光

宮島眞一

なにツ!! 俺の先祖か? ア、俺の先祖か!!

俺の先祖はな、憚りながら鍛冶屋なんだ、ア、鍛冶屋だとも、鍛冶屋さ——

何時か知らねえ、さうさ、俺なんか生れても居ねえんだから知つてるもんか、ずうつと昔の事よ、なんでも安藝の宮島通ひの千石船の舟夫ふなとだつたんだつて事だ、そして陸に上れば錨いかり作りよ、

なんだつて? 漁夫りゅうふで鍛冶屋かつて? さうよ、碌でもねえ鍛冶屋さ、なんでも朋輩を切つたとか、殺したとかつてんで、仲間はづれにされて、俺の生れ故郷に逃げて來たんだ。

なにツ!! 本當かつて? 本當か嘘か分るもんか、俺の云ふこつた。

それで流れ流れて落ち行く先は——つて云ふ奴よ。俺の生れ故郷迄流れて來たんだ。あつちで追ひ出されこつちで追ひ出されして、渡り者だ、ごろつきだ、あぶれもんだ。そんな悪態は、きつと耳にたこの出來る程聞いたに違えねえ。

それで何故、俺の村に落ち着いたかつて?

うるせえ奴だなあ、さつきもさう云つたじやねえか。俺の生れねえ前だ、そんな事分るもんか。

大方女でも出來たんだらう。そこですつかり堅氣になつて、男盛りの俺の先祖は、渡り者、他所の者と嘲られながら、これもそれらしい、素性も分らねえ、どつかの女と、意氣投合つて奴さ。

えッ、早えなあつて?、馬鹿!! やれ許嫁だ、やれ結婚式だ、やれ御披露だなんて、ほざいてるやからにこちとら社會の深

刻さが分つてたまるけえ。

二人で仲よく、なるべく村人むらひとの目につかない、風の當らない、谷合の荒地に堀立て小屋を建てたんだ。渡る世間に鬼ばかりや居ねえ、腕つ節の強い俺の先祖、さうよ、アダムよ、そのアダムを見込んで呉れた御金持があつたんだ。代々のお庄屋さんで、まあ今なら學徳共に備はれる、と云ふ所だらう、その御仁ごにんの御情で、俺の先祖、さうだ、アダムとイヴは、小やかな煙を立て始めたのが鍛冶屋だ。

なにツ 漁夫は？ つて

馬鹿野郎、山の中で船乗りが出来るかい。

おい、山ん中だぞ、谷の間でさ、晝なほ暗き、せゝらぎの音する杉の並木の只中で堀立小屋を作つてよ、腕つ節のいやに強え、六尺豊かな目のギロリとした赤銅色の大男が、右手にハンマーを提げて、眞赤に灼けた鐵棒を火の中から出しては叩き、出しては叩きするんだ。腰にボロを巻きつけた、いやに乳の大きい年増の女が、之も兩手で大ハンマーを提げて打ち下ろすんだ。おい、想像しても見ろよ、大槌がドンと打ちや、小槌がカツと受けらあ——。

トーン カツ、トーンカツ と山中響やまのゆき渡るんだ。トーン、カツ、トーンカツつて、トンカツつて今じや洋食の名だが、俺の先祖の頃にや、鍛冶屋だつたんだ。

この厨川白村とか云ふ男に見せたら、随喜湯仰の涙をこぼす様な、ラヴシーンから、俺の先祖は生れたんだ。口先ばかりいやに達者で、それと云つて、いざ鎌倉となりや、何一つ出来ねえ、今の奴等に見せてやりてえよ、あゝ、俺の先祖のこのアダムとイヴをよ。

かうして生れたのが俺の先祖の第二世さ。それから第三世、第四世と續いて、どうして儲け出したか、俺は知らねえ、俺の

生れない前の事だから。

いつの間にか、今の所謂ブルジョワちゆう奴になつてゐたんだ。さうよ、金貸しもしたらうし、質屋もしたらうし、貧民いじめもしたさ、ブルジョワになつたんだもの。

俺の生れた頃には、ぢいさんも生きてゐた。なにもう鍛冶屋だもんか。大旦那様で、火鉢の前に、しよつちゆう坐つて煙草をスパリス・パリやつてゐた。でも先祖の鍛冶屋を忘れねえ様につて家の屋號を鍛冶屋つて云つてゐた。今でも俺の村に行つて見ろ、鍛冶屋の跡と云や、知らねえ者は居ねえ、さうさ、跡よ、

つぶれたんでえ。

俺のぢいさん迄はさうして煙草をスパリス・パリふかして火鉢の前に坐つて、よかつたんだ。俺の親父の代、さうだ、俺の親父の時代になると、

『ドアをコツコツとノックして、新時代が訪れて』來たんだ。やれ小作問題、やれ立毛差押へなんて言葉があつちにも、こつちにも聞え出して來たんだ。

ぢいさんに、大旦那様、大旦那様と、ペコペコ頭を下けてゐた先祖傳來の家の子郎等は一人死に二人死にして、その代りに『余りにそれでは横暴ではありませんか、そんな事をされると、我々小作人共は、一致團結、武器を執つて争闘を開始しなけりやなりません』と云ふ新時代が奴が、コツコツとノックしてやつて來たんだ。

俺の親父もその、新時代つて奴だつた。

地主と小作人。この二階級の争は、俺のぢいさんと、俺の親父と、この二人で代表されてゐた。俺の親父はいつも小作人の味

方だった。ちつとは新知識を嚙つてゐたせいもあつたらうが、一番の原因は、先祖が苦心して貯めたといふ、その苦心を知らない事だった。

親父はいつも、せわしいし、お袋は妹を抱いて寝るので、俺はいつもちいさんに抱かれて寝た。

そのちいさんの、さうだ、ばあさんは俺の生れない先に死んでゐた。寝物語と云へば、いつも先祖の、と云つても三四代前の血の出る様な苦勞を話して呉れたもんだ。そして、この家も、この廣い屋敷も、あの向ふの山も、みんなさうした先祖の賜なんだ、これを、ぶつつぶしたら、ほんに罰かぶりだぞえ、と話を結んだものだ。いつも聞いてはゐないで、うつらうつらと眠りこけてゐたが、毎晩毎晩の事だったので、俺も倒頭、覺えてしまつた位だ。

そのちいさんの言葉の中には、いつも俺の親父、つまり、ちいさんの息子への不満と、不平と憤りと恨みとが含まれてゐたんだ。

『そんなに迄して、稼ぎためた、俺んとこの身代だ。なあに、高がどん百姓のあいつ等に、ブーブー云はれて、ヘイヘイ参つてゐる奴が、あるもんか』といつも俺の親父の事を惡態ついでゐたんだ。

それでも時勢は移つて行つた。

ちいさんがいくら心の中で、やきもきしてゐても、いくら煙草をスツパリ、スツパリとふかしてゐても、俺の親父は、やれ村會だ、やれ縣會だ、と云つては、小作人の味方をしてゐた。そして開墾事業に手を出したり、山を開拓したり、ちいさんの、スツパリスツパリにも、心中の苦悶にも一向お關ひなしに、ドンドンやつてのけた。そしてちいさんの代には、丁度閣下が、貧乏少尉にでも、もの云ふ様な口調だつたのに、俺の親父は、百姓達と友達だつた。一處に酒も飲めば、一處に遊びにも行つた。無論拂ひは親父がしたんだらう。隣村でも、俺んとこの村でも、あつちの地主、こつちの地主共が、

『ありや、なんだ、鍛冶屋の若旦那、氣でも狂わつしやたんか。あの太郎兵衛の倅と、あねえな、口のきき様をして』と評判

された位なんだ。

それで話は早いや。

数万兩とはいくまいが、数千兩の鍛冶屋の財産も、失敗續きの開墾や、縣會議員の選舉費や、又盲目判の、しよい込や、それやこれやで傾きかけて、いや、傾いてしまつたんだ。

とどのつまりは俺の親父、俺と妹と、お袋と、それにぢいさんと、そして先祖代々の大きな鬼の岩屋とを残してアメリカとやら、その頃はまだ地獄か極樂かさては唐か天竺か位にしか考へてゐなかつた、遠い所に突つ走つてしまつたんだ。それも、さつきの太郎兵衛の俸とだ。

さあ、かうなりや、隣り村やら、その又隣り村から大金持ちの連中が、証文片手で、ぢいさんに食つてかかつたもんだ。やれ何百兩、やれ何千兩、ぢいさんはボカーンとして、碌々返事も出来ねえでゐたつけ。お袋はいつも涙ぐんで、オド／＼してゐたつけ。

もうその頃は、俺も尋常に行つてゐた。十二三位だつたらう。學校に行けば急にみんなの態度が變つて來た。正一ちゃん、正一ちゃんと呼ばれてゐたのが正一、正一となつた。そして、しまひには、正公、そして遂にはおい正、俺の草履を取つて來いと、石段から、わざと落した草履を取りにやらされた。今迄暴君の様に振舞つてゐた俺も、實際、それだけに、却つてづらかつた。今なら

『フン。人情薄き事紙の如し、か、淺ましい俗人の世界、さもありなん、さもありなん』なんて高を括つてゐられたらうが、高が十二三の少年だ。そんな事、分るもんか。

家に歸れば、いつもいつも、火鉢の前には、ぢいさんを、とり圍んで、紋付袴の、やれ和泉屋の旦那さん、やれ若狹屋の旦那さん、といふ風に毎日の様につめかけてゐた。そしていつも、ぢいさんが、

『弱りました』と云ふ様な顔をしてゐた。お袋はその体で目を泣きはらして控えてゐた。勝ち誇つた様な、これ等の旦那さんは、なんとか、かんとか、どなり立てゝは氣弱いちいさんをへこましてゐた。

召使ひ達も、一人減り、二人減りして、やつと歩ける様な、子飼ひの爺やと、婆やとが居残つた。これも何處にも行くところがないから、何卒置かして呉れ、お給金は戴きません。食扶持だけ位働きますから、と云ふので残されたんだ。

おい。俺はその時、情けなくなつたんだ。

なんだつて又、親父の奴、百性の味方なんて、しやがるんだ。なんだつて又、そいつ等のおだてなんかに、乗つかつて、縣會議員なんかになりやがるんだ。なんだつて又、俺達の知りもしねえ、アメリカなんてとこへ、突走るんだ。

おい、その時、おらあ情けなくなつたんだ。

そして倉の裏の、小川の畔の石垣に、腰かけて、ボンヤリしてゐたんだ。その小川に向ふを、目白取りに八公と信公が行く。いつもなら、

『正一さん、目白取りに行きなばらんか』と會釋する所だが、畜生!!、尾羽打ちからした、その時の俺にや八公だつて、信公だつて、振向きも、しねえや。

『嗚呼人生は無常だ。あてになんぞなるもんか。こんな人生、やめつちまえ』と云ふ所だが、まだ十二三のその頃の俺に、そんな事分るもんか。

で。結局、整理も濟んだ。淺ましい俗物共が、金の爲なら、どんな事でもと云ふ、惡鬼共が、よつてたかつて、先祖傳來の鑛冶屋の、目星いものを、根こそぎ持つて行つてしまつた。その競賣の日だ。あらかた片付いてしまつて、最後に虫追ひの鐘が出て來た。虫追ひ、なんて云つても、貴様等、都人^{みやびと}には分るめえ。夏になると、この鐘と、太鼓とを叩いて、松明とをぼして、畔道を、すーつと一廻りするんだ。そして虫を追ふと云ふ口實で、實は若者達の楽しみなんだ。

鍛冶屋の鐘は、親鐘で、いつか隣り村と、鐘の鳴らしくらをして、うちの鐘の鳴るのは聞えるが、それに立ち優る鐘の音はどの村にも、なかつたと云ふ、評判の親鐘だ。この鐘は鍛冶屋の誇でもあり、俺んとこの村の誇でもあり、實に又、俺の誇でもあつたんだ。

ア、それを又、なんといふ事か!!

卅両、卅五兩、卅六兩、エー、四十兩と、せつて、行くではないか。俺は全く小供心に、なんで又、あの鐘まで賣らなきやならん様になつたんだ。人の心も知らないで、それを又、せり上げて喜ぶ馬鹿つてあるもんか。余つ程、飛び出して、競賣人を殴り飛ばして、俺んとこの鐘だ。なにしゃがるんでえ、と怒鳴りつけてやりたかつた。

愈々解散の時になつた。

ちいさんと、お袋と、それから子飼ひの爺やと、婆やと、それから恩に着てゐた二三のとしより達と、いと、しめやかな宴會が開かれた。

なにツ、宴會で惡るけりや、酒盛りだ。

帝國ホテルや、精養軒の宴會しか、知らねえ、奴等にや、とても、この悲痛な、深刻な、そして情そのものの發露たる、この酒盛りの氣持ちなんざあ、万分の一も分りつこねえんだ。

そして酔ふた。ちいさんも酔ふた。婆やも酔ふた。平作どんも、兵三どんも、それから、爺やも、お袋もみんな酔ふた。酔ふた。『高い山から』が唄はれた。聲高らかに唄はれた。歌が無くなつた。

そして、ちいさんが、俺にも、唄へと云つたんだ。俺はそんな歌なんか知らなかつた。今ならキンキラ節やら、明日はお立ちか、やら、その場にふさわしい、歌をいくらでも唄つてやつただけど、尋常五年のその頃の俺にや、全く見當がつかなかつたんだ。酔にまかせた爺や達迄。

『坊ちゃんも、唄ひなされ、坊ちゃんが、唄ひなさりや、わつし達が、あとつけて唄ひまさあー』とやるんだ。

丁度その頃三月で、俺は學校で『螢の光』を習つてゐた。空で唄える歌としては、それつきりだつた。仕方がないので、畢世の聲張り上げて、

ほ——た——るの　　ひ——か——り——

ま——ど——の　　ゆ——き——

とやつた。爺やは、突つかけた齒の間から、

ほ——た——るの　　ひ——か——り——

とあとをつけた。黴くちやの婆やも、それからぢいさんも、平作どんも、兵三どんも、それから俺のお袋も頑是ない妹に乳をふくませながら、

ほ——た——るの　　ひ——か——り——

ま——ど——の　　ゆ——き——

ふ——み——よむ　　つ——き——ひ——

か——さ——ねつ——つ——

俺も歌つた。ありつたけの聲はりあげて、がらんどろになつた、まるで海賊に掠奪された様な、天井の高い、大きな棟木の見える、圍爐裏に、檜の丸太を、五六本くべて、赤い、赤い焰は、ぢいさんの顔にも婆やの顔にも、それから爺やの顔にも、お袋の顔にも、艶々と輝いてゐた。

俺は歌つた。俺は歌つた。あらん限りの聲はり上げて、

ほ——た——るの　　ひ——か——り——

ま—ど—の ゆ—き—
ふ—み—よ—む つ—き—ひ
か—さ—ね—つ—

昭和元年十二月三十一日